日本語版への序文

私は、日本の読者がこの翻訳を手にしていただけることを大変うれしく思います。この本は主にアメリカの歴史を取り扱っているにもかかわらず、その教訓は全ての人々、とりわけ日本に関係しています。主要国が 1930 年代に取り組んだまさに同様の金融および財政の「刺激」策が、1990 年代以降の日本政府および日本銀行によって実行されています。実は、2008 年以降のアメリカおよびヨーロッパは、日本が 10 年以上前から取り組んでいることを単にまねているだけであると、我々が論じることもできるでしょう。全ての場合において、これらのケインジアン的「問題解決策」は、うまくいっていません。

この本で、私はこれらの混乱した事実と対立する説明を提示しています。私は、オーストリア学派、とりわけルードヴィヒ・フォン・ミーゼスおよび（ノーベル賞受賞者）フレデリック・ハイエクによって展開された景気循環論に依拠しています。私は、日本の当局およびその他の先進国によって支持される「刺激」策が、実際には真の回復を妨げることを明らかにしています。

2015 年 1 月

ロバート P. マーフィー

訳者まえがき

哲学者、ジョージ・サンタヤナ（George Santayana）が書いているように、「もし過去の失敗から教訓を学ばなかったなら、再び同じ過ちを繰り返すだろう」（*Reason in Common Sense*, 1905）。

2008 年の恐慌以来、IMF を含めて、多くの人びとが今回の恐慌と 1930 年代の大恐慌を比較してきた。ベン・バーナンキはミルトン・フリードマン生誕 90 周年を祝する演説で、「大恐慌に関して、あなたの言ったことは正しかった。恐慌が起こったことは大変残念なことであった。だが、あなたのおかげで危機は再来しないであろう」と述べた。ここで彼が言おうとしていたのは、フリードマンと、共著者、アンナ・シュウォーツのおかげで、大恐慌についての正しい教訓を学ぶことができ、それが繰り返されないだろう、ということであった【久保恵美子（訳）『大収縮 1929 － 1933』（日経BP社、2009 年）】。だが、はたしてそうだろうか？　過ちが避けられたのではなく、繰り返されたのではないだろうか？

なによりも、2008 年に実際に恐慌が起こったという事実そのものが、おそらくは、1930 年代の教訓が十分には学ばれなかったということを暗示している。もしそれが学ばれていたとすれば、2008 年の恐慌は確かに避けられていたはずである。少なくとも、例えばバーナンキのように、大恐慌の「教訓を学んだ」と主張する者ならば、将来危機がやってくることを世界に警告することができたはずである。だが、このいずれもが実現しなかった。恐慌は避けられなかったし、当時の経済学者のほとんど誰もが警告を発しなかった。多くの者は、アラン・グリーンスパンも含めて、彼が*Foreign Affairs*誌 2013 年の記事で認めているように、ただ、驚愕するばかりであった。

何度も口やかましく恐慌を予測したのは、元下院議員のロン・ポール（Ron Paul）と投資家で投資信託会社のマネージャー、兼著作家のピーター・シフ（Peter Schiff）の 2 人だけだった。恐慌が起こるまでの数年間に多くのトーク

ショーに出演したシフのビデオをユーチューブで見ることができる。これらのトークショーで、シフは、経済が回復過程にあるわけではないと警告し、どうして彼がそう考えるかを、繰り返し説明していた。そのつど彼は番組の中で皆に笑われてきた。ロン・ポールも、多くのスピーチやインタビューで 2008 年恐慌に至るまでの経済に不安を表明してきた。

それほど多くの専門家が間違いをおかしたのにどうしてこの 2 人が、どちらも経済の専門家ではなかったにもかかわらず、正しかったのだろうか？　実は、シフもポールもともに、マレー・ロスバード、フレデリック・ハイエク、そしてルードヴィヒ・フォン・ミーゼスから経済学の理論を学んだのだった。彼ら 3 人は皆、著名な経済学者で、現代オーストリア学派の主導者であった。尤も現代オーストリア学派は、今日では、オーストリア本国とは何らの関係も持っていない。その主唱者がオーストリア出身ということに由来しているだけである。周知のように、オーストリア学派経済学は、19 世紀末から 20 世紀初期にかけて、ウィーン大学のカール・メンガー、オイゲン・フォン・ヴェーム-バヴェルク、そしてフリードリヒ・フォン・ウィーザーによって創始された。今日でも、彼らの伝統を引き継ぐ経済学者が多くの国々で活躍しており、その成果はオーストリア学派経済学者として紹介されている。

さて、大恐慌と 2008 年の大不況との間には多くの類似点がみられる。そのひとつとして、当時、多くのエキスパートや経済学者が恐慌に驚愕したことがあげられる。アーヴィング・フィッシャーもその一人であった。彼が、ウォール・ストリートで株価が暴落する数日前に何ら心配する事態ではないと発言し、多額の財産を失ったことは有名な話である。当時、正しい予測を行ったオーストリア学派経済学者のリストをミーゼス・インスティチュートのウェブサイトで見ることができる。（http://wiki.mises.org/wiki/Austrian_predictions）

このようにみると、本書で論じられているように、大恐慌および 1930 年代のニューディール政策について、従来の見解とは違った見方を示すことは時宜を得ているといえよう。実際に何が起こったのだろうか？　フランクリン・D・ローズヴェルトとニューディールは、はたして多くの者が信じているように、金融恐慌からアメリカと世界を救ったのだろうか？　これらの問いかけに

対してどう答えるかということが、今日多くの人々が直面している問題の決定に重大な意味を持っている。どのような経済政策が実施されるべきだろうか？　私たちはどのような政治家を選ぶべきだろうか？　アベノミクスはうまくいくのだろうか？　消費税の引き上げははたしてよいことなのだろうか、わるいことなのだろうか？　これらの問題は、読者の皆が、経済に関心をもっていようがいまいが、どれもすべての人びとに影響を与える重要問題である。ミーゼスは、*Human Action*の中で次のように書いている。「経済学は社会の根本的問題を扱うので、だれにも関係があり、すべての人のものである。それはあらゆる市民にとって重要かつ適切な科目である」【村田稔雄（訳）『ヒューマン・アクション』（春秋社、1991年）第38章6節】と。

ロバート・P・マーフィーは経済学者で、ミーゼス、ハイエク、そしてロスバードの作品を習熟している。彼はミーゼスの最高傑作、『ヒューマン・アクション』やロスバードの*Man, Economy and State*【吉田靖彦（訳）『人間・経済及び国家』（青山社、2000，2001年）】のガイドブックも書いている。したがって彼は、オーストリア学派経済学に精通している。彼はミーゼス・インスティチュートに所属する学者であり、しばしばそこで講義を行っている。本書は、大恐慌についての主流派とはちがった見方をしており、歴史的事実と、日ごろあまり読まれたり紹介されてこなかった論者たちの見解に基づくことにより、読者が自らの見解を再検討する助けになるだろう。マーフィーの解釈は、おそらく読者が学校で学んだものとは全く違ったものであろう。実際、各章で大恐慌の「神話」について言及されており、そして「読者がおそらくは読まないであろう本」の短いリストがあげられている。それらの文献は、読者が学校で学んだものと見解を異にするものである。

本書は、経済学のテキストではないし、アメリカ経済学へのガイドブックでもない。本書は、「通俗的な公式の見解」や、日ごろ学校やテレビ・新聞などのメディアで繰り返され教えられ、唱えられているオーソドックスな歴史にあえて疑問を持とうとする、知的で好奇心旺盛な読者のための簡易な歴史書である。

2015年1月　　マーク J. シェフナー

謝　辞

私は、この本の出版を提案してくださったRegnery社のハリー・クロッカーに御礼申し上げたい。このような一冊が必要であることは明らかであったが、彼からの電子メールを読むまで、私には思いもよらなかった。

また、マーク・ソーントン、デビッド・ヘンダーソン、ロバート・ウェンツェル、ジョー・サレルノ、グイド・ハルスマン、デビッド・ゴードン、トマス・ウッド、ザック・クロッセン、ピート・ジョンソン、そして私が忘れている他の人々に対しても御礼申し上げる。また、私が原稿を作成している際に多くの疑問に答えて下さったミーゼス・リストサーブ・グループのメンバーにも御礼を申し上げなければならない。また、私はこの本が完成に向かうにつれ不規則となる睡眠時間に耐えてくれた、妻のレイチェルと息子のクラークにも御礼申し上げなければならない。

ロバート P. マーフィー

序　文

読者のみなさんは、1920 年代が向こう見ずな投機の時期であり、一般の庶民がやりたい放題の大企業によって振り回されていたと学んだことだろう。また、資本主義を野放しにすると、結果的には、株式市場の大暴落、恐ろしい経済崩壊、そして失業の急増をもたらすと学んだことだろう。さらにはハーバート・フーヴァーが、危機を緩和するのに無策で、ホワイトハウスの大統領執務室から、自由に放任された市場経済が崩落するのをクールに傍観していたと学んできただろう。当時のアメリカ市民は政府の助けを求めており、そのため圧倒的にローズヴェルト（FDR）に投票した。というのも、ローズヴェルトの心を揺さぶるすばらしい演説が人びとに希望を与え、その革命的ともいえる政治綱領で経済の改革をもたらしたからである、と学んだことだろう。最後に、（読者が受けた教育の違いによって、上の説明にある程度の食い違いがあろうが）、実際に合衆国を大恐慌から立ち直らせたのは、ローズヴェルトではなく、第二次世界大戦だったということも学んだことだろう。

しかし、この教科書上の説明のどの部分も全くの誤りである。そして一次史料で確認することをいとわない正直な研究者なら誰でも、そのことがわかるであろう。しかしほとんどの歴史家は経済学に無知であり、ほとんどの経済学者は歴史を知らない（実際、テレビ放送で人気の経済学者についても同じことがいえる）。政治家や官僚は、いつもただ声をそろえて大きな政府を称賛する御用経済学者・御用歴史家を頼りにしている。（たとえ彼らの台詞に事実とずれがあったとしても）。しかし、読者が史料を誤って利用しない限り、大恐慌の神話は議論の役に立つ。それらの史料は、大胆でカリスマ的なローズヴェルトに対して、無関心で無為なフーヴァーという理解とは正反対をなす。実際には、フーヴァーは仕事を作り出すため公共事業に前代未聞ともいえる金額を使った。そして、なんと、ローズヴェルトは選挙運動でフーヴァーの浪費を罵倒していたのである。しかし、大統領の交代は、歴史家にとっては、仕事を始

めるのに極めて都合のよいきっかけとなった。そして感傷的なローズヴェルトの伝記作家たちは、幸福なことに、読者の頭をその偉大な人物を聖人伝説で満たしさえすればよかったのである。

本書は、アメリカの経済史で最も重要な時期についての案内書であり、経済がいかに作用し、政府が何をすべきかについての私達の根本的な理解に関係するものである。

本書は上に述べた神話が事実かどうか確認し、いかにそれらが誤りであるかを示し、読者に真実を教えようとするものである。それはアメリカの歴史の中で重大ではあるが、まだ語られていない、あるいは少なくとも十分には語られていないもののひとつである。それはまた、政府内の多くの者、リベラルなメディア、あるいは学校でもあまり知ってもらいたくないもののひとつである。しかしそれは真実であるし、やろうと思えば読者が自分自身で調べることのできるものでもある。

また本書はただの歴史書ではない。まさに今この時、連邦政府や連邦準備銀行は、前代未聞のやり方で彼らの権力を行使している。政府は何兆ドルものお金を直接給付や補助金の形で大銀行や大会社に与えており、連邦準備銀行は、経済を「刺激する」という名目で、信用市場に多額の資金をつぎ込む用意をしている。その場合、大恐慌の教訓がこの巨額の負債の苦痛や民間部門として知られてきた部門への連邦政府による干渉を正当化してきた。

しかし、連邦政府がその権力奪取のさいに基礎をおく「歴史」は全くの神話に過ぎない。本書は実際に何が起こったのかを示し、そして連邦政府が人びとに犠牲を強いる神話（ジャガーノート）の弁解者に反論し、読者に正しいことを教えようとするものである。1920 年代に株式市場のブームをもたらし、1929 年の恐慌を不可避的にひき起こしたのはとりもなおさず、（一部の大企業と連合した）大きな政府であった。市場をいじりまわし、回復をおくらせ、そしてアメリカ史上最悪の恐慌へと導いたのはとりもなおさず、フーヴァー政権下、ついでローズヴェルトの大きな政府であった。そして、もし真実ではなく、神話によって導かれるならば、再びそうした恐慌が起こりうるのである。

本書で扱う問題は単なる保守主義、自由主義、共和党、民主党の間に見られ

る見解の不一致の問題ではない。事態は今日では以前にもまして深刻になっている。1930 年代に起こったことは、「新ニューディール」を求める大合唱によって、今日においても繰り返されている。ただ、十分多くの市民がタイミングよく真実を学ぶことによってのみ、アメリカでさらに大きな大恐慌が起こるのを防げるのである。

ロバート P. マーフィー

学校で教えない大恐慌・ニューディール

目　次

日本語版への序文……i

訳者まえがき …… iii

謝　辞 …… vi

序　文 …… vii

第1章　大恐慌 …… 1

狂騒の1920年代　2

大恐慌の始まり　4

フランクリン・D・ローズヴェルト大統領とニューディール政策　7

1937年～1938年の恐慌内の恐慌　10

“Rosie the Riveter”（ジェイン・フラジー主演の1944年アメリカ映画）：『幸せが再びやって来る』　12

ほんとうだよ？　説明する必要がある　13

その理由とは　14

1930年代に取られた一つの政策が失敗だったならば、今日、なぜその政策が機能するのだろうか？　18

第2章　不況を大恐慌に変えたフーヴァーの大きな政府 …… 23

ハーバート・フーヴァー：資本主義の首尾一貫した批判者　27

フーヴァーの「新しい経済学」　29

不況を大恐慌に拡大した第1の手段：賃金支持政策　35

不況を大恐慌に拡大した第2の手段：国際貿易を妨害させる　39

不況を大恐慌に拡大した第3の手段：民主党と同様の税制・支出政策を行ったこと　42

不況を大恐慌に拡大した第4の手段：ミニ・ニューディール政策の採用　50

ハーバート・フーヴァー：大きな政府を唱道した人物　55

第3章　ケチな連邦準備銀行のデフレ政策が大恐慌を引き起こしたか …… 61

フリードマンの見た「気弱なFRBと1930年代のデフレ」　63
物価下落なんか怖くない　65
デフレ：歴史が証明するもの　69
連邦政府はなぜ通貨を破壊するのか？　71
敗者を支える　72

第4章　保守派の経済政策が大恐慌を引き起こしたのか …… 81

狂騒の1920年代　83
アンドリュー・メロンの驚くべき減税　85
大恐慌は1920年代の好景気の反動なのか？　89
古典的金本位制はどのように作用したのか？　90
金本位制が大恐慌を引き起こしたのであろうか？　94
金本位制に対する最後の審判　96

第5章　ニューディール政策の失敗 …… 99

フーヴァー大統領の政策の継続：生産の抑制と賃金引上げ　105
我々が唯一恐れるのは、ローズヴェルト大統領その人だけである　111

第6章　ニューディールの暴挙 …… 121

ローズヴェルトの「銀行休業」　122
金本位制離脱　130
全国産業復興庁：大きな政府と大企業の癒着　133
ニューディール政策はどのようにして貧しい人々を飢餓に陥れたか　136
老齢年金制度：それは実際には保険でもなければ社会的でも安全でもなかった　138

公共事業促進局：悪い経済学とよい政治学　142

第7章　戦時の繁栄の神話 …… 149

「割れた窓ガラスの誤謬」――不滅の誤り　152
悪事に悪事を返しても善事にはならない　153
戦時の繁栄だって？　統計上大嘘でしょう　155
中央計画：平時には良くない、戦時には破壊的　159
あとがき：第二次世界大戦が実際にアメリカの生産を促進した点　164

第8章　大恐慌――その今日的教訓――　…… 169

連邦準備制度理事会が住宅バブルとその崩壊を引き起こした　170
自由放任主義者ジョージ・ブッシュの神話　174
バラク・オバマは新生フランクリン・D・ローズヴェルトなのか？　180

参考文献（読者がおそらくは読まないであろう本）…… 184

訳者あとがき …… 187

事項索引 …… 193

人名索引 …… 197

著者・訳者紹介 …… 200